

『天皇の代替わり』に当って～天皇制との対峙～

坂内 宗男

2016年、明仁天皇は、高齢による公務遂行の問題から『8・8メッセージ』を行い、明治以後では前例のない生前退位を求めて結局一代限りの特別法を制定、本年4月をもって当天皇は退位して徳仁皇太子が5月1日をもって天皇に即位、元号も「平成」から「令和」に変わった。そして、剣璽等（三種の神器）承継の儀に始まり、10月には即位礼正殿の儀、最後の11月には大嘗祭という一人前の天皇にする最大儀式に至るまで30余の天皇代替わり神道儀式が国税（166億円といわれる巨費）を用いて実施される。しかし、天皇メッセージは、憲法7条の国事行為（制限列挙）違反の疑いが強く、また政府による一連儀式は、政教分離（第20条及び89条）と主権在民（憲法前文及び第1条）の原理に反する故に、裁判訴訟がすでに起きている。

天皇制とは、男系による万世一系の皇統を旨とし、我が国の歴史の中枢で支配者として君臨したかのように錯覚するが、「万世一系」については15代応神天皇以前までは全くの神話の世界にあり、また雄略天皇（21代）の子清寧（22代）の若死においてすでに途切れていることを知るべきである。「男系」についても古代にすでに8代6人の女性天皇（最初の女帝は推古天皇<33代>）が存在したことから見ても崩れているのは自明である。

そして鎌倉幕府から戦国武将→徳川幕府においては、京都朝廷は権力の蚊帳の外にあって、民衆は天皇の名さえ知らなかった。しかし注目すべきは、あの徳川家康さえ「征夷大將軍」の称号欲しさに京都まで行ったことから見て、権力なくして隠然たる力をもつアメーバ的存在の天皇魔力が依然として生きていた証左であって、人間差別と排除の構造は権力者に巧みに利用されたのだった。

明治維新とは薩長藩閥による国家統一革命であるが、その内実は274の藩を束ねるために天皇制を利用し、伊勢神宮の天照大神を天皇家の皇祖神と結びつけて、天皇は大元帥「人」にして神聖不可侵たる「神」である国家神道体制を作り、世界に伍した軍事強国を旨とした神権天皇制軍事国家の道への驀進にあった。従って内には日本人の精神を教育勅語で締め付け心的統一を計り、人間の命よりも菊の御紋の付いた武器等を尊び、天皇の為に命を捨てる一億総玉砕精神を植え付け、靖国神社は天皇の為に戦死した者を英霊として顕彰する施設（従って会津<私の故郷>軍や西郷隆盛などは排除）として機能したことにある。しかし、神国（実は唯我独尊島国根性）であるはずの日本は、実体は不義である侵略戦争を行い、祖国も相次ぐ空襲で無残な荒廃と化し、果ては国体護持のため無益な沖縄戦と広島・長崎への原爆投下により無条件降伏一未曾有の徹底的敗北にて終わったのだった。

ところで、敗戦時支配者のみならず民衆の驚くべき行動は、戦争責任告白「お詫び」を被侵略国に対してではなく戦争の最大責任者である天皇（宮城）にした理性を欠如した異常さにあった。従って、まさに主権在民・基本的人権・絶対平和主義という革命的憲法を与えられながら、内実は相変わらず日本（天皇）教者（＝古厩<丸山眞男>）の精神構造にあり、早くも朝鮮戦争時の1950年代、A級戦犯容疑から解放された岸信介を中心とする自主憲法（天皇制軍事国家）制定の動きは高まり、孫の安倍首相の執念により今日の憲法改定の現実化が俎上にのぼっている、といえよう。そこにはキリスト者であると否とにかかわらず、日本人思考の根底に、神道の「和」（個人を抹殺した、聖徳太子の17条憲法を見よ）と「禊ぎ」（お祓いによる責任の帳消し＝無責任）があって、世界的には益々国際化の中で、米国への卑屈な従属と隣国（被侵略国）への謝罪と戦後補償も出来ない無責任体制が今こじれにこじれている原因といえよう。かつて矢内原忠雄が60年安保改定時、責任ある立場の安倍能成が辞任を表明した時、思想家の責務は理想に現実を近づける努力に在りその逆ではないと批判したのであったが、目の前のよかれ主義には希望も未来もないといえるのではなかろうか。

いまキリスト者は剣が峰に立たされているのではないか。第一、主権在民の憲法にあって、元号制という天皇中心の日本社会がいかに憲法違反の時代錯誤かを主の前に噛みしめる必要がある。そして、かつての15年戦争に皇民として加担した罪、戦後67年被侵略国に対する戦責告白（日基教団）を行い、89年昭和天皇死去を契機に天皇を神とした偶像崇拜の罪を謝罪（FOR）した今、天皇教キリスト派ではないヤハウエ神の前にしっかりと立って（10 戒1 項<出エジプト20:3）キリストの十字架にて罪を焼き切り、被侵略国に謝罪して主の前に生きる事が出来るか、問われているのではないだろうか。